

【議事】定9

(1) 宇宙探査シンポジウム及び国際宇宙探査戦略に関するワークショップの開催結果について

JAXAの井上理事が資料9-1(宇宙探査シンポ・WS開催結果)を説明した後、下記のように活発な質疑応答があった。質疑応答では、JAXAの月・惑星探査推進チーム副事務局長の佐藤直樹氏も回答に加わった。

青江: フレームワーク文書が担当レベルで合意されたと言うことであるが、今後、各機関に持ち帰ったときの取り扱いはどのようになるのか。各機関で何かが形作られるのか。

JAXA 佐藤: 14機関の間で署名を取るようなものではない。日本が事務局として取りまとめ、各機関に送付する。各機関毎に、機関として承認するとか、単に受領するとか、それは各機関に任されている。

青江: 纏めたということに、どのような意味があったのか。

JAXA 佐藤: 今回の合意はあくまでも担当レベルの合意で、それ以上の合意に持っていくのは、各機関の理解レベルが違うので、難しいことである。担当としては各機関の考えに任せようと言う話し合いが行なわれた。

青江: 実態としてそうであったかも知れないが、「合意」とは何であるのか。かなり意味のあるものなのか。まとまったと言うことで前進したと思うのか。

JAXA 井上: フレームワーク文書に書かれていることは、基本的な考え方である。文書自身に異議のあるものではない。それぞれがどう使っていくかは今後の課題で、具体化を進めることになる。フレームワーク文書が合意されたか否かはさほど重要で

はないと考えている。基本的な考え方が揃えられたことが重要である。

青江: 揃えると言っても14機関が、機関の意思として、合意したのではなく、**担当者レベルでの合意に何の意味があるのか。どうもストンと胸に落ちないがまあ良いということか。**¹

JAXA 井上: この種のことが行われたことは初めてであり、前進だと思ふ。

青江: そういうことか。その上に立って、今後の展望であるが、「具体的な国際協力の調整に重心が移されていく」と云うのは、これは噛み砕くとどのような展望なのか。

¹ 後で理由を発言しているが、米国の動向を気にしての発言であるので、気持ちは解らぬ訳ではない。しかし、根本的な考え違いがある。昔から、軍事用語に「訓令」「指令」「命令」「号令」の沢山の「令」がある。宇宙開発委員が気にしなければならないのは「訓令」「指令」の段階であり、それを決めるための発言は委員会・部会で沢山出ており、作れないことは無い。今気にしていることは「命令」「号令」の段階の議論であり、担当者に委ねて良い範囲である。

立川理事長は「現在の科学予算は少ないと思っている。」と言っており、通信・放送・地球観測などの実用衛星技術の開発との比較で言っていると思われる。科学観測分野の議論では「探査のコミュニティの力は弱い」と、「科学委員会に任せてしまうと、赤外やX線観測にリードを奪われ、探査が葬り去られることが危惧される。」ことなどが聞かれた。天体観測より探査を優先させるのではないが、同列以下にするものではないと言っていることになる。また、「探査プロジェクトの選定に当たっては、「その科学的価値を重視する」との発言も有った。予算の大枠を示し、基本的な選定基準が示されており、「訓令」を纏めるための情報は十分に入手している。

JAXA 佐藤:このフレームワーク文書の中で、調整メカニズムを作るように協力することが書かれている。この文書を離れ、どのようなメンバーシップで、どのような...(打ち切られる。)

青江:調整メカニズムは方法論だからそれはそれで良いとして、「今後の展望」に書いている、「具体的な国際協力の調整に重心が移されていく」となり、具体的なテーマに事が移って行くと理解すれば良いのか。

JAXA 佐藤:はい、そういうご理解で結構²だと思います。

青江:そうすると、次のイタリアの会合辺りから、テーマ、内容に話が入っていくのか。

JAXA 佐藤:先ずは、調整メカニズムを作るのが、次のステップと認識されている。

青江:と言うことは、具体的な協力の内容が登場するのはまだ先のことなのか。

JAXA 佐藤:担当レベルでの調整は少しずつ進むと思うが、具体的な協力項目で合意に至るのは大分先だと思う。

青江:その上で聞きたいのは、今回、アメリカは何をしたかったのかという点での感想はあるか。と言うのは、従前も申し上げたと思うが、アメリカは今年のヒューストンの会合の時に、この調停にはかばかしい進展が無いということに、かなりイラついていた、と言う状況であったと思う。それで、今回このような状況と言うのを、アメリカはどう見ているのかということ、差し支えない範囲で聞かせて欲しい。

² 「結構」ではないと思う。「米国主導で進むか、14 機関合意で進むか」の調整が先ず必要であり、「フレームワーク文書+調整メカニズム文書」で、14 機関合意で進む体制を整備するのではないか。

JAXA 佐藤:このフレームワーク文書は、アメリカではなく、欧州とカナダが主唱してきたものである。アメリカはこの活動から身を引いていた感じであった。調整に時間が掛かっていたことがあるので、イラつきは有ったと思うが、今回収束に向かったことはホッとしているところだと思う。

青江:本当?

JAXA 井上:やはり、何時までも議論が進んでいくだけでは、進みようもないという意味でイラついていたと思う。そこで形が纏められたことは、アメリカにとっても一つステップを踏んだと言う感触なのだと思う。

池上:国際調整の在り方とは何かが良く解らない。EUの世界では当たり前であるが、アメリカや日本にはそのような経験が無い³。日本として発言が無かったような話なのか。アメリカだって国際調整は余りやっていない。どこかモデルとかが有ったのか。EUのモデルと言えればそれなりにイメージは解るが、此処で言っている国際調整のあり方とは、何を議論していたのか。

JAXA 佐藤:モデルは、(遮られる)

池上:やっぱりEUのやり方?

JAXA 佐藤:EUとか、まあ、ESAが提案し手いるのでESAのやり方とか、シオスのやり方をある程度参照している印象はあった。

池上:それでは日本は殆ど発言する場は無かったのか⁴。

³ 認識違いが有るようだ。ISSの計画を進める段階で、既成事実をアメリカが積み上げながら進め、各機関は膨大な出費を強制された、との印象を持っている。この反省を踏まえ、各国の主体性を維持しながら進めることの出来る、国際協力形態を築きたい。

⁴ どうしてこのように断言できるのであろうか。

JAXA 佐藤:この文章の2/3位は、なぜ探査をするのかということが書かれ、「はやぶさ」の例も経緯として含め、探査の意義があったことを著している。その辺りの文書の調整、今後のフレームワーク作りで言うと、プログラム・オブ・プログラムの思想を是非進めようと働きかけた。それらの表現を文書に盛り込むことに成功している。

池上:そうすると、或る目標を達成するための議論でなく、プロセスで議論があったと云うことか。

JAXA 佐藤:そうです。先ず目的を整理して、その後国際調整メカニズムを作る計画である。

池上:例えば、デシジョンメイキングの具体的なところは(割り込む)

JAXA 佐藤:そのような細かいところはこれから行なう。

JAXA 佐藤:調整メカニズムの持つべき理念と言うようなレベルの話し合いを行なった。

松尾:フレームワークの辺りは、合意することも無いようなことを、合意されたような印象を持って、この後、国際調整メカニズムの話になると、実務者が集まってなんとなく意見を纏めるのではなく、機関としての意思が入った形で、きっと纏めていくのでしょうね。

JAXA 井上:これは、私の感想ですが、当たり前なのが合意されているのではないかという部分が、確かにあるかとは思いますが、ただ、14機関が、それぞれの国のそれぞれのやり方が、全体として生きるようなやり方で進めようと言う、基本的な考え方である種の合意が出来ていることは、大事なステップを踏んだと思う。

松尾:後は、後のところにある、「具体」の中身をどうするかということで、JAXAが鋭意検討中と思うが、宇宙開発委員会も一緒になって検討を深めていかなければならないと思っている。

池上:NASAとESAの長官はどんなメッセージを出したのか。

JAXA 井上:シンポジウムの基調報告では、それぞれ国際協力・国際協調の話をした。NASAの長官は、自分たちがやる部分があるので、それをやるとも言った。ESAの長官は、先程仰ったように、ESAの各国の事情を考えながら、物事を進めることの大事さを強調された。

松尾:枠組みについて、日本は経験が無いとのお話もあったが、ISSの経験は、どういう活かし方をするにせよ、あるのだと思う。

青江:次の会合から具体的な中身の議論が始まる可能性がある。その時、「日本として何をするか⁵」が大切である。全日本的に推進していくための3兆の中で、力を糾合できる良いテーマを早く形作ることが、そろそろ必要となってくる。そう云ったものが有るからこそ話しができることになる。その活動を進めていると思うが、アップデートしてもらおう必要を感じる。

JAXA 井上:はい、仰る通りだと思います。出来るだけ、着実に且つ速やかに進めたいと思います。

松尾:今の青江さんのご意見は、宇宙開発委員会の統一意見と思っていただきたい。

⁵ 具体的なプロジェクトの姿が見えないと、採否の議論が出来ないと考えているのではないかと疑いたくなる。脚注1で述べたように、「令」=審議の結論には段階があるので、各職位に併せた「令」を発すれば良い。国際会議に出席する担当者が働きやすい環境を用意するのも、宇宙開発委員会の役目であろう。

ベトナムで作業部会を行った際、細かすぎる号令を貰った北の国の代表は、「問題は解決済み。」と、同じ言葉を繰り返すしかできなかったという例もある。双方が益を得る代替案を見つける会議では、拘束は緩いに越したことは無い。